

## LHさんからの質問(2010/03/29)と、それに対する回答

エンペン大学の紀要にのっている鈴木先生の「東アジア近代の知的システムを問いなおす」を拝読させていただきました。わからないところをお尋ねします。

1、「たとえば、日本の大学制度は、当初からヨーロッパの大学制度の根幹を成す神学部に対応するものをもたなかった。やがてヨーロッパでは神学部に対応する宗教学が、東京帝国大学文科大学の哲学のうちに登場する（一九〇四）。この措置は、おそらく「神道は皇室の祖先崇拝であり、宗教ではない」とした政府見解（一八八二）と関係するだろう」に関してですが、僕がわからないのは、東京大学や帝国大学が神学部を持たなかったことと、「神道は皇室の祖先崇拝であり、宗教ではない」としたこととの関係です。確か、先生の昨年の日本文学研究会の大会における基調講演では、神学に対する人文学部というのがヨーロッパの大学制度の根幹であるが、それをまねした日本もそれに相当するものを作ろうとしていた。が、神学部を持たなかった。もし、日本の「神道」を「宗教としていけば、神学部にあたる神道学部ができていたかもしれない」ということになるのでしょうか。では、「皇学」が登場したのはどうしてでしょうか。教えてください。

答) まず①、私が延辺大での基調講演で述べたことについて。もし、「神学に対する人文学部というのがヨーロッパの大学制度の根幹である」と言ったとすれば、あるいは、そのようなメモが残っているとすれば、それは間違いです。「神学がヨーロッパの大学制度の根幹であり、その神学に対するものとして人文学が形成されたのだが」に改めてください（大学の制度は、キリスト教の教会制度がおおもとになっています。教授、助教授などの階級も、また学位なども、そのように言えます）。

次に「それをまねした日本もそれに相当するものを作ろうとしていた」の「それ」は、神学部です。そして、それは明治初期のことであり、その内部構成は「皇学」と「儒学」でした。これが「皇学」が登場した理由です。

しかし、東京大学が出来たとき、ヨーロッパの神学部にあたる学部はつくられなかった。したがって「皇学」も制度上は消えたわけです。のち文学部の中に「和文学」という学科として現れることになります。

②では、なぜ、東京大学ができたときに、それ(ヨーロッパの神学部に対応する学部)が

消えていたのでしょうか。これについては、これまで文部省内で洋学派が台頭したために、と説明されてきました。しかし、なぜ、洋学派が台頭するとヨーロッパの「神学部」にあたるものが消えるのか、よく説明されているとはいえません。なぜなら、洋学派の中には、ヨーロッパの国民国家主義による国民文化の考え方にならって、日本の伝統を築こうという人びとがかなりいたからです(洋学派すなわち欧化主義者ではありません。これを混同するところに日本の文化ナショナリズムをめぐる誤解の根本のひとつがあります)。

③そこで、概念の問題としては、神道は皇室の祖先崇拝であり、祖先崇拝は「宗教」とはいえないから、「神道は宗教ではない」という政府見解(1882)として出される素地のようなものが、東京大学の創設時には、すでにあったと考えられる、というのがわたしの見解です。実証できていませんから、まだ仮説にとどまっています。

なお、これについては、鈴木貞美『「日本文学」の成立』第一章などに書いてあります。

④「もし、日本の『神道』を『宗教』としていけば、神学部にあたる神道学部ができていたかもしれない」ということはできます。それは、イギリス王室の宗教としてイギリス国教会があるように、日本の皇室の宗教として伊勢神道を定めることです。当時、そのような道も選択肢のひとつとして考えられたにちがいないと、わたしは推測しています。

しかし、そうはならず、やがて、神道が皇室だけではなく、国民の祖先崇拝のように考えられていきます。穂積八束の血統国家論が、その代表的なものです。ですから、この「神道は宗教ではない」としたことが「国家神道」を生み、それがのちに大きな勢力となるおおもとがあるとわたしは考えているのです。

2、「やがて明治期後半のアカデミズムに民衆文化を蔑視する傾向が起こると、日本のシェークスピアと称された近松門左衛門と儒学道徳を根本にすえた曲亭馬琴を除き…」について。江戸時代に庶民の文化が繁栄したことは、ヨーロッパのゴッホにも影響を及ぼした浮世絵があるくらいですから、わかりますが、庶民が楽しむ劇作(たとえば「国姓爺合戦」など)も明治後期までずっと盛んだったのか、そのことについて教えてください。

答) 歌舞伎の上演は、明治期も大正、昭和戦前期、戦後期もさかんといえますので、

基本的な答えは「はい」ということになるかもしれませんが、一概にはいえません。まず、あなたのいう「劇作」が何を意味しているかによって答えが変わります。また劇作家や作品のそれぞれによっても、そして時期によっても異なります。

① あなたのいう「劇作」が浄瑠璃や歌舞伎などの庶民が楽しむ「演劇」についてのことならば、一般的に言って、江戸時代のヴァリエーションを楽しむ気風によって、上演形態(ストーリー展開も含めて)が変化しています。とくに近松門左衛門の演劇は、何度も繰り返して上演され、その都度、原作から離れてゆきます。これについては、上演に対する劇評の類を見て、何がどのように変化したのかを探っていかなければなりません。たとえばあなたが例にあげている「国姓爺合戦」も江戸時代のうちに、間狂言が廃止され、各段の関係が変化してゆきます。

このようなことを無視して、ただ、その上演回数と日本の民衆思想の動き(この場合は日中間の関係に対する入り組んだ感情になりますが)とを直接関係づけて論じたりするなら、それは短絡したアマチュアの議論になってしまいます。

明治期の歌舞伎については、歌舞伎改良運動によって、大きく変化します。そして、明治期には、また脚本本位の考え方が出てきます

なお、このようなことについては、澤田晴美『近代における演劇評——ジャーナリズム、アカデミズム、役者の身体』総合研究大学院大学学位論文(2009)が詳しく論じています。ただし、近松の世話もの(当代もの)に限っていますが。

② あなたのいう「劇作」が上演される演劇ではなく、「台本」「脚本」についてであれば、近松門左衛門のものは、江戸時代を通して、かなり読みものとしても流通し、他のジャンルにも影響を及ぼしています。何が読まれたか、ということはまだよく解明されていません。明治期以降については、それなりに調べられると思いますが。

しかし、たとえば江戸時代後期の四世鶴屋南北のものについては、脚本はほとんど流通せず、演劇としては、1910年代に新歌舞伎の動きのなかで復活がはかられ、脚本も1925年に全集がまとめられるという経緯をたどります。

そういうわけで、あなたの質問に対する答えは「一概にはいえない」ということになります。これらについては、鈴木貞美『「日本文学」の成立』第二章七「脚本と劇評の改良」などを参照してください。

③ なお、ヨーロッパの”literature”は、文字に関する範囲を指すことばですから、”drama”は、読む対象としての「脚本」を指しています。”oral performace”をも”literature”の一部として扱うのは、今日の新しい研究の傾向ですので、この点、「文学史」では注意を要します。

### 3、三「芸術と美術」の一段

「一九七六年、工部省設置の工部美術学校という学校名などに…」というところに関してですが、「一九七六」は、もしかして、「一八七六」のプリントミスではないでしょうか。

答) はい。そのとおり「一八七六」の誤記です。ご指摘ありがとうございます。